通俗
坐禪法

019732-000-5

特53-185

通俗坐禪法

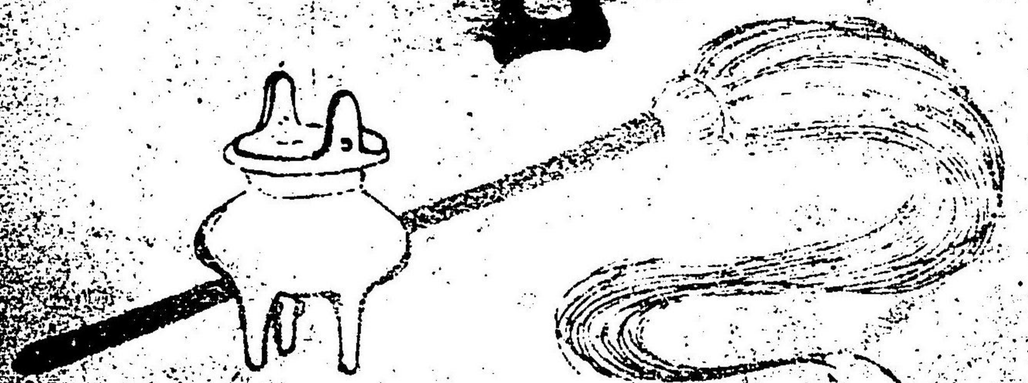
監外堂

M33.7

ABG-0537

D-89

佛通坐禪法



通俗座禪法正解

耳根圓通論

卷

禪要訣

堀越半禪編纂
原田玄龍禪師著
菅原如庵纂譯

明治五年內交省圖書

東京藍外堂藏版

特53
185

序言

一座禪法、モト深奥玄妙、且ツ一言一句、概ヲ皆佛典佛語ヲ用ヒタレバ、漢文ヲ能クスル者ト雖モ、容易ニ之ヲ解スベカラズ、況ンヤ二ツナガラ之ニ熟セザル初學ニ於テヲヤ、本書ハ修禪ニ關スル多クノ諸典籍ヲ渉獵シ、其華ヲ摘ミ、其粹ヲ摭リ、平易ノ文字

ナ以テ之ヲ譯解シ、專ラ初學ノ講習ニ資セントセシ者ナリ。

一本書ハ半禪庵主著『座禪法正解』、玄龍禪師著『耳根圓通論』、及ビ如庵居士著『參禪要訣』ノ三書ヲ合卷トシ、權ニ名ケテ通俗座禪法ト題ス、彼ノ耳根圓通論ノ說ク所、頗ル奇警ニシテ佛家ニモ未ダ知ラザル者多シト、

帝國圖書館藏

初學ノ士、此法ニ因テ參禪ノ道ヲ求メナバ、其進歩、亦大ニ速カナルヲ覺ム。

一曩キ藍外堂ニテ發刊セル『膽力養成法』ヲ購讀セラレシ諸氏ハ本書ヲ併讀ベシ、本書ハ是レ膽力養成ト大ニ關係アレバナリ。

一古來ヨリ座禪ハ獨リ佛家ノ業トシ

テ、俗間之ヲナセシ人少ナシ、座禪、元ト佛家ノ專有物ニアラズシテ、其功果無量、宗俗共ニ各其益アリ、故ニ本書編纂ノ主旨ハ、自今俗間ヲシテ、亦功果ヲ分有セシメント欲セシノミ。

明治庚子仲夏　編者誌

座禪法正解目次

第一　座禪は何の爲にするか　一
第二　座禪の功果　二
第三　座禪前の用心　三
第四　座禪時の用心　四
第五　座禪の場所　六
第六　座禪の方法　七
第七　調息法　九
第八　雜則　一〇
第九　結論　一一

耳根圓通論目次

第一　實驗確證の始末　一三
第二　觀音入流の理由　一五
第三　定力を用ゆるの軌儀　一九
第四　結論　二三

參禪要訣

自二五至四一

座禪法正解

半禪庵主編纂

第一　座禪は何の爲めにするか

座禪をなして、得る所の功果は、廣大無量なるも、之を要するに、迷悟（信心銘に曰く迷は寂亂を生じ悟は好惡なし）凡聖（地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上を六凡と云ひ聲聞、緣覺、菩薩、佛を四聖と云ふ）を超脱して、眞理を發見するにあり、眞理を發見する、即ち是れ大悟にして、自然菩提（即ち道なり）の修證を究盡し、身心安樂の法、亦是れより好きはなし、實に

座禪は自然に身心脱落して、五欲を離れ、五蓋を除き、豁然として徹證し、本來の眞面目を現前し、心原を悟りて、寶藏を開くの手段なり。

第二　座禪の功果

故に參禪をなせば自ら諸緣を放捨し、萬事を休息し、善惡を思はず、是非に管するなく、心意識の運轉を停め、念想觀の測量を止む、故に又自ら心地を開明し、本分に安住せしむ、即ち妄息めば寂生じ、寂生すれば智現じ、智現ずれば眞見はるを云ふなり、之を本來の面目を露はし、又本地の風光を現すとも云ふ、座禪、本と斯の如き者なる故に、之を能くすれば一切の妄念を

斷絶し、一實の眞心を現成し、心神玲瓏、明白自照、靈然思量せずして、一切に通ずる底の大識量を生じ、死をも懼れざる底の大膽力を有する人となるを得べきなり、是れ實に座禪の功果にして、他法の以て之に比すべき者なく、誠に是れ佛道の正門なり。

第三　座禪前の用心

座禪は實に衆生をして、佛の知見に開示悟入せしむるの法にして、佛道の正門なり、故に之をなすには其用心最も大切にして、前に述べし如く、先づ妄心を除き、善惡の思を休め、且つ一切の緣務を放捨するの工夫、是れ第一の用心なり、然らば如何

して之を除休放捨すべきやと云ふに、修禪の人は、常に苟且にも歌舞妓樂に近くべからず、喧諍戯論をなすべからず、妓藝に誇り、才名を衒ふべからず、美衣美食を貪るべからず等、總て心神を汚染し、攪動し、參禪の障害となるべしと思ふ者は總て之を禁ずべし、是れ實に淨心の方法にして調心の至要なり。

第四　座禪時用心

座禪に臨む時、衣服は新しきをば要せざれども、洗濯して淨潔なる者を用ゆべし、是れ心身の爽然を覺ゆるのみならず、垢賊を去り、發病の氣支ひなければなり、又食物を程好くして、必ず飽食などなして打座すべからず、而して又、座禪に三不足と

云ふ事を嫌ふ、即ち衣足らず、食足らず、眠足らず是れなり、此の三不足は、修禪退惰の因緣なればなり、以上は是れ實に調身の要術にして修禪の要規なり。

又座禪の時は、牆壁、禪椅及び屏障等に倚るべからず、又烈風の處、高顯の處等に座すべからず、是れ思念放散し、諸根動き易く、且つ疾病の生ずる憂へあればなり、須く正身端座、務て思慮靜沈なるを要すべし、座禪の時、身或は熟するが如く、寒するが如く、滑なるが如く、堅きが如く、柔なるが如く、重きが如く、輕きが如く、驚覺するが如きあるは、是れ皆息の調はざる爲めなり、之を調べんと欲せば、暫く口を開張して、長息なれば、長に任せ、短息なれば、短に任せ、漸々に之を調ふべ

し、心若し沈むが如く、浮ぶが如く、朦なるが如く、利なるが如く、或は恍惚として佛身を見、菩薩を見、或は智見を起し、經論に通利する等の如きある、皆是れ觀念、氣息不調の病なり、若し此病ある時は、心を兩跌の上に安し、心若し昏沈する時は、心を髮染眉間に安し、心若し散亂する時は、心を鼻端丹田（丹田とは臍下一寸五分を云ふ）に安ずべし。

第五　座禪の場所

座禪は行往座臥何れにても之を行ふ可らざるなき事なきも、然れども自ら淨念に障害ありと思ふ所、又思ふ時は、決して打座すべからず、而して座禪に何人にも好き所は、城市の喧聲の達せざる寺院、或は山中巖窟、又或は溪邊樹下等は、是れ即ち澄心淨念の處にして、屈竟の場所なり、然れども事務に繁劇なる人などは朝起飯前、或は一日の事務を終り、夜に入り、寢に就く前一二時間づゝ之を靜閑の淨室に行ふべし。

又座禪室には（家屋中、座禪室と定むる場所あれば）香を焚き、花を飾るなど最も好し、又佛菩薩及羅漢の像などを安置するは頗る可なり、是れ自然敬心整肅、煩惱を斷ち、妄念を捨るに宜しければなり。

第六　座禪の方法

是れよりは愈々座禪の方法を說くべし、先づ座禪室にて座禪せ

んと欲せば、極て靜閑の處を撰び、能く洒掃して、厚く茵褥を敷くべし（厚く茵褥を敷くは身躰の座屈を防ぐ爲めなり）而して結跏趺座し、或は半跏趺座す、結跏趺座は先づ右足を以て左膞（股なり）の上に置き、左足を右膞の上に安じ、半跏趺座は惟左足を以て右足を壓し、寛く衣物を繫て齊整ならしむべし、次ぎに右手を左足の上に安じ、左掌を右掌の上に安じ、兩手の大指相拄へ、又拄指の對頭臍に對して安ずべし、而して正身端座、左に側ち、右に傾き、前に躬り、後に仰ぐ樣の事をなさず、耳と肩と鼻と臍と必ず共に相對し、舌は上腭を拄へ、息は鼻より通じ、唇齒相著て、眼は正しく開き、張らず細めず、即ち半眼に開くべし、斯くの如く調身已に終れば、欠氣安息、所謂口

を開て氣を吐く一兩度すべし、又次ぎに身躰を搖振し、座定して、兀々端座すべし、是に於て箇の不思量底を思量せよ、如何か思量せん、曰く非思量（經曰無爲は非思量の境界、非思量の境界は是れ佛の境界云々）是れ即ち座禪の要術なり。

第七　調息法

座禪をなして、或は妄念涌き、或は昏眠生じ、又成は心志散亂などする時は、能く心を鼻端丹田に安じて、息の出入を數ふべし　之を調息の法と云ふ、其數息の仕方は、息の出入を合して一息となし、一より十に至り、終りて復た始め此の如く十に至りて、又一より始め、逐次何回も此の如くなすべし、此法を熟

すれば自然煩惱を破斷し、散心歇み、念相觀を休息して、座禪の全能を全ふするの境に至り得べし、座禪に熟せざる人は先づ此法より入るべし。

第八　雜則

座禪中、昏睡生ずれば身を搖し、目を張り、或は目を濯ひ、頂を冷し、猶醒めざる時は順行、一百歩に及べば昏睡必ず醒めん、又定より起んとすれば（座禪止て起んとする事）先づ兩手を兩膝の上に仰安し、身を搖す事七八度、口を開き、氣を吐き（入定の時は氣を吐て後身を搖す、出定之に反す、是れ出入の別）輕々に座を起ち、徐々行歩順轉順行すべし、決して卒暴なる

可らず。

第九　結論

座禪は即ち佛性海に入りて諸佛の躰を標し、本有の妙（本來具有の）淨明の心（汚染せず、一切を照破するの）頓に現前し（初て發露す、故に現前と云ふ）本來一段の光明、終に諸境を圓照し、諸佛と同躰の智慧德相を得せしむるの法にして、妄想悉く盡き、大夢從て醒む、此境之を大悟大徹と云ふ、實に是れ、座禪修案到達の面目にして、之を禪家にては打成一片、又大死底の人、或は普賢の境界など云ふ、座禪、元と此の如き者なる故に、之をなせし人には、古來多くの大政治家、大豪傑、大功業

家等の大人物、大膽力家を出せり、是れ予の不敏を省みず、今や最も我國に必用なるを察し、之を諸君に紹介する所以なり。

座禪法正解 終

耳根圓通論

曹洞沙門　原田玄龍著

觀音耳根圓通の法は、予の實驗確證する者にして、楞嚴經中、微細に之を說けり、予は此妙法により、菩提を顯發するを以て聊か其軌儀を明にせん爲め、便宜上本論を四章に分つて之を述べん。

第一章　實驗確證の始末

予、幼より出家し、悟道の事につき頗る熱心し、諸の智識に參し、座禪公案に餘念なかりし、然るに原坦山師は、頗る博學に

して、確説を主張すると聞き參禪を求めたり、時偶〻慶應三年九月頃なりき、師の所説は、全く他の智識と異なり、皆實驗に出るを以て、其教に從ひ、修行したりが、明治二年六月七日、師の首楞嚴經講義を聽き、觀音耳根圓通の卷（初於聞中入流亡所所入既寂動靜二相了然不生）の句に及び、深く心念を感じたり、即ち從前の工夫を放下し、定力を耳根に用ゆる殆ど一月餘、其初め堅確にして、定力及び難かりしが、漸くにして耳根に定力の入るを感じ、腦臆に圓通し、前腦より後腦に陀那（楞嚴經に陀那微細の識習氣暴流をなす是なり）の流法を反へし、腦中空界の如く歡喜踊躍し、睡らざると七日餘、後定力を胸腹に用ゆるに、日ならずして悉く解脱するを得たり、爾來二十有

六年の久しき、尙之を實究するに、身體益〻壯健且つ逆境界に逢ふも怖畏の念なく、恒に大安樂の地に住す、觀音經に曰く「於怖畏急難之中能施無畏」と誠に然るを覺ふ、而して耳根より腦臆に定力を用けるときは、頭耳に動搖を顯すを以て、外形に於ても幾分の信すべきあらん、何故に耳根よりして、定力を用ゆるときは、心性の本體を明瞭するを得るや、次章に於て之を述べん。

第二章　觀音入流の理由

腦隨は神系中樞の存する處にして、胸腹は其支配を受くる神系の支末なり、而して心王の居城は腦臆にして、古來の智識、或

は胸腹を空淨する者あるも、未だ曾て說の腦臆に及ぶ者なし、然るに予は師の講義に感じ、實驗眞證上よりして、心王の居所は腦中にあるを認む、且つ醫科解剖の學派に於ても、神系の中樞は腦臆にありて、精神の依所も其中にありと唱ふ、這は當に然るべき理にして、現に涅槃經も「頭爲殿堂心王居中」とあり、然り而して觀音流を反入すとは、右耳根に定力を用ひ、前腦より後腦に陀那の流注を反入するを云ふ、楞嚴經に曰く「阿難白佛言世尊云何逆流深入一門能令六根一時清淨」と、又曰く「佛問圓通我從耳門圓照三昧緣心自在因入流相得三摩提成就菩提斯爲第一」と、又曰く「由我所得圓通本根發妙耳門然後身心微妙含容周徧法界」とあり、僅に此數句を以て見るも、耳根は定力を用ゆる

に、頗る肝要の門戸にして、前章に示したる「初於聞中入流」云々の如く、最初此妙耳に定力を用ひ、流相を反入する時は、所謂身心一如の妙境に至る者なり、抑流相とは、陀那識なる者にして、之を執持識とも、不可覺知堅住器識とも、又下覺不知器世間識とも云ふ、原を腰骨盤中に發し、昇流して脊臆より腦に入り、腦氣と和合し、胸腹四肢に下り、以て全身を滋養生育す、然れども停滯纏縛の質あるが爲め、腦に在ては無明となり、胸腹に在ては煩惱となる、無明も煩惱も皆陀那の變質にして、楞嚴に云ふ所の、無始生死の根本と、無始菩提涅槃元清淨の體とが和合し成る者にして、恰も豆汁の鹽液と和して豆腐となるが如き者なり、而て此無明煩惱と稱する者は、憎愛愁腦怖畏臆

嬌等の念を起し、此種々の疾病を釀發する者なり、然るに之を解脫せんと欲せば、耳根より定力を用ひ、陀那の流注を反入せざる可らず、此法は大乘の骨髓にして、釋迦黃老が二十五菩薩の爲めに、楞嚴會上に演說せし、二十五圓通の眼目なり、惜哉、中古以來、虛義の說盛んに實證法衰へ、觀音入流の義、曖昧に屬しぬ、近世に至り、歐米の文化、我國に渡來してより、政體、風俗を初め、諸學科及發明的事業に於て、實に進步の著しきを覩る、然るに佛敎家とし云へば、依然廣遠空漠の說を妄信し、毫も確乎的實の法により、解脫を求る者なきは抑如何なる理由ぞや、若し此儘に放任し去んぬ、眞正の佛法は全く衰滅し、邪敎益々跋扈せん、是予の誹謗を甘んじ、護法の爲めに喋々する所以なり。

第三章　定力を用ゆるの軌儀

今、玆にて性を顯發する順路を說かんに、譬へば金碧莊嚴の王城に登らんには九重の門よりする如く、我心、王城に到らんには六根門頭あり、六根とは眼、耳、鼻、舌、身、意を云ふ者にして、識之に住し、六識となる、他又六塵ありて、六根六識を蔭蔽し、隨て細大無量の無明煩惱を起す、之を打破して進む時は、必ず心源に達す、之を稱して自覺性智と云ひ、又眞如法性と云ひ、倘又心王宮殿に到るとも云ふ、若し其心王宮殿に到れば七珍萬寶完く備はるを見て、始て煩惱菩提昨夢の如くなるを

知る、云何六識を打破せん、曰く六根門頭に定力を用ゆるにあり、楞嚴に「迷晦即無明發明便解脫解結因次第六解一亦亡」とあるは、之を云ふ者にして、就中予の如きは耳根に定力を用ひてより、直ちに心性を顯發するを得たり、故に初學の士は必らず耳根よりするを要す、既に耳根に定力の入るを覺へば、胸腹にも定力を用ゆべし、何となれば、設令耳根よりして全腦に定力の及ぶにせよ、神系上より觀察を下すときは、腦部は主宰に止り、胸腹と非常に密接の感應を有する者なればなり、故に腦部の空淨を得んと欲せば、宜耳根に定力を用ゆるのみならず、胸腹にも工夫を怠らざるを要す、然らずんば圓滿を期し難し、要するに腦臆は原府なり、苟も原府の空淨を專とし、而して胸

腹、及び四肢の如き支派に及ぼさば、破竹の勢ひもて空淨するや嘹々たり、惟ふに陀那の原泉は混々として腰骨盤よりして上流し、腦氣と和合（起信論に、覺と不覺と和合し、一に非ず、異に非ず、之を阿賴耶識と名づくとあるは之を云ふ）し、以て胸腹四肢に下る者の如し、故に耳根に定力を用ゆるときは、腦臆にて陀那の和合を遮るを以て、胸腹に流注すること至て少なく、隨て胸腹に定力を用ゆるに當り、解脫する極めて容易迅速なる者とす、近世屢〻腦裡に力を用ゆべしと唱ふる者ありと雖も、這は思慮分別の異名詞に過ぎずして、予が主唱する耳根より腦臆に圓通する定力を用ゆるにはあらざるなり、云何定力、曰く一箇の精神的作用を以て、體內に一種の力を用ゆるを云ふ、凡

そ通常の力と稱する者は、手足によりて外部に向て發動する者を云ふも、茲に云ふ定力と稱するものは、全身の內部に向て發動する者を云ふ、定力を用ゆる事たる、始めは困難に似たれども、行住座臥、常に工夫を怠らずんば、何れの時か自知するを得、驀然打破せば天を驚かし、地を動かさん、故に實際圓通に至る迄は、多少の經過を要すべし、予初め胸腹吐裡に向て工夫し、後改て耳根に定力を用ひしに、或は宿緣の然らしむる處ならん、僅に一ヶ月餘にして父母未生前本來の面目を露現す、是予の實驗眞證する處、創聞の士、疑惑を生ずる勿れ、然れども、人各前生來宿業のあるあり、其無明煩惱の厚薄により、遲速緩急を免れず、此法や智愚利鈍を擇ばざる者とす、故に專一に工

夫せば必ず至る、達磨曰く「不立文字敎外別傳直指人心見性成佛」と、身安かならざれば、心安かならず、心安かならざれば、身安かならず、論じて此に至れば、心身一如の妙境は、世上幾百の學科ありと雖ども、蓋し佛敎解脫の法門を除ひて得難からん。

第四章　結論

以上陳述する如く、耳根に定力を用ひ、前腦より後腦に陀那の流注を反入し、尙胸腹に定力を用ひ、諸部の惑病妄識を除滅するとたる、予の廿六年來實驗眞證する處にして、而かも楞嚴、涅槃、觀音、起信の諸經論等、既に明文のあるあり、此際他の

經文を引證せん歟、千百にして足らず、故に予は敢て新說と云ふにあらず、中古衰滅の法を發見したるに過ぎざるのみ、於是乎、獨り自ら足れりとせず、普く社會公衆に向て、此の眞性の活用を自在にする妙法あるとを告げ以て、修學の便に充んと欲す、抑修行に信解行證の階序あり、若し之を履踐して、心身無碍の境界に至らば、心身は猶泡影の起滅する如く、迷悟修證は夢裏に水火を渡る如けん、此法を稱して耳根圓通と云ひ、此法を稱して首楞嚴と云ふ、此法知らんと欲せば此定參究すべし。

耳根圓通論　終

參禪要訣

如庵居士纂譯

道學の者、須く參禪せざるべからず、參禪は是れ修行鍛冶の關要なり、座禪辨道の活機なり、公案は學人鍛冶の鐵槌なり、轉迷開悟の警策なり、公案參禪、實に是れ、禪門佛祖の機緣なり、是れ次下に參學の要訣を錄せんと欲する所以なり。

明本禪師曰く、或人問へるあり、曰く聞く禪は敎外別傳なり敎ふべからずと、然らば一大藏敎は皆虛語なりとせんやと、答へて曰く、佛祖の言敎は乃ち衆生の妄を破り、眞に入るの蹊徑を指せるのみ、亦如來の境界を描寫したるの圖本のみ、たとひ

蹊徑を指示せらるゝも、苟も肯じて親しく其蹊徑を踏みて、他方に孤露せずんば安んぞ眞に入るの日あらんや、或は高く九仞の崇臺に登りて、目を縱にして其境界を見ずんば、則ち圖本も亦何をか爲さん、須く信じて、而して後ち行じ、行じて而して後ち到り、到て而して後ち守り、然して後ち始て得とすべし。或人謂く、傳燈載する所の諸祖、皆一機一境一挨一拶に於て便ち脫略圓淨卓然として超越す、安んぞ其の蹊徑を歷涉し、崇臺に登るの說を許さんや、達祖の「直指人心」と謂へる、曹溪の「說ニ箇直指一早已曲了」と云へる、此說の下、間に髮を容れず、又豈其信じて後ち行じ、行じて後ち到るの說を容れんや、靈利の衲僧は言前に薦得するも、已に途程に涉り、句外に歸趣を知

るも猶鈍漢と稱す、謂ゆる電光石火、豈其の停思停想を容れんやと、世人往々此說を肯ふて、殊に古人の言前句外に於て、未だ領悟せざるの時、其艱難辛苦昏散障礙の甚だ多大なりしとを思はず、苟も寢を廢し滄を忘ずるの志力を奪はず、又二三十年寒を衝き、暑を冒して、敢て怠惰せざるの勤勞を操るとを肯はずんば、安んぞ自然に超越するの理あらんや、彼れ徒らに古人の易きを見て、而して其の未悟の際に於けるの難を知らざるなり、蓋し今に難からざるときは則ち安んぞ後日に易きことあらん、何故に此の如くなる、蓋し生死事大は、是れ、無量劫中薰習結習する底の一種拔くべからざる業根なればなり、今日に在て不退轉の身心を以て、直下に一飜に飜轉せんと要す、戲劇ならん

や、今衆生の心に即して佛心に混入せんと欲するも、之をして勤苦志力を資けざらしめば、亦未だ自得する者あるを見ず、釋迦文佛道已に無量劫中に成じて衆生の妄に輪轉を受くるを見るに耐へず、乃ち生を王者の室に示して、頓に萬乘の榮を捐て、影を雪山に沈めて氷に臥し、檗を嚙み、備さに勤苦を嘗む、道成するに至るに及んで徒を聚め、法を說くと雖も、惟だ丐食樹捿する止り、未だ嘗て長蓄する所あらず、此は是れ衆生界中、第一箇の世出世間を超越したる樣子なり、佛果を感ぜんと願ふ者は宜しく之を思ふべし。

或人謂く、已に無量劫來妄に輪轉を受くることを知れり、たとひ勤苦を加へざらしむるも、將來却て自了の理あらんと、答へて曰く、輪廻もし自了の理あらば、豈諸佛復た法輪を轉ずることを勞せんや、自了なきを以ての故に、必ず信に依て力行す、力行して而して後到る、斯れ法輪轉ざるべからざる所以なり。原ぬるに夫れ生死の情妄は天より降るにあらず、地より湧くにあらず、空より變するにあらず、人に因て興ふるにあらず、蓋し無始時來自心を迷失し、輪轉遷流して、今に至て息まざるに因る、自ら迷ふて此の淪溺を受くるが故に、もし自ら悟らずんば、百千の佛法と雖も竟に我を奈何せん、凡そ日用話頭を提げ、工夫を做すの處、昏沈擾々、散亂紛々、把捉不定の處を覺得するに、初め一點の外障なし、只々是れ一箇生死の爲めにするの心不眞不切にして然るを致せるなり、故に凡そ話頭に參するの

時、所參の話頭に向つて推任し、生は與に同生し、死は與に同死せんことを拌取せよ、第一に別に方法を求むることを許さず、第二に咎を境緣に歸すべからず、第三に一念の感情を瞥起することを得ざれ、是の如く用心せば、相應を獲ざる者あること鮮し、參禪して悟すると悟せざるとは、蓋し根性利鈍の等差に由れり、もし根性果して鈍ならば但々不退轉の深心を以て之を待て、其悟らざることを患へざれ、而も堅密の志を具すと雖も、業習を遣除する能はざるときは、即ち堅密の志も亦未だ憑むべかず、何をか業習と謂ふ或は順に遇ふては則ち情を恣にして喜び、逆に遇ふては情に信せて怒り、愛に遇ふては則ち情に狥ふて著し、憎に遇ふては則ち情を極めて離れ、是に遇ふては則

ち情を盡くして稱し、非に遇ふては則ち情に任じて毀る、乃至善惡取舍、種々の分別通じて業習と名づく、是の如き業習は根性に係はらず、皆情妄の遷す所なり、本色の道流悉く當さに之を屏盡すべし、業習淨き處、道力益々堅し、もし之を屏盡せずんば徒らに學ぶも、畢竟何の益かあらん。

參禪或は生を盡して悟らざるも但々信心退かずんば來世決定して總持門を具せん、或は未悟の前に於て誤つて相似の語言を將て心に置かば、一字と雖も亦多生業眼を障ふるの塵とならん、

古人曰く、參は須らく實參なるべし、悟は須らく實悟なるべし、謂ゆる實參とは生死無常を超越せんと要せば、一點佛法の知解を求めざれ、謂ゆる實悟とは乃ち當念頓に生死無常を空じて一

點佛法の知解を存ぜざれ、凡聖情盡き、迷悟見消し、生佛兩なから忘じ、能所俱に混じて一歩を進むる時は則ち高く、佛祖所不倒の境を踏み、一歩を退くときは、則ち遠く凡聖所未染の塵を離る、維摩之に節して不二門と爲り、釋尊之に據りて菩提座と爲り、諸祖之を秉りて金剛劍と爲り、萬靈之を體して優曇華の如し、大病を治するの藥王、飢渴を濟ふの甘露、萬方の貧人に給するの寶藏、三界の羈鎖を裂くの利刀なり、如上種々の異稱は皆海印三昧の變相なり、海印三昧とは何ぞや、個々本具せる靈光不昧の如來心是れなり。

又、宗本禪師、參禪の龜鑑を開示して曰く、學道の門、別に奇特なし、根塵を洗滌して悟を以て則と爲す、諸仁者無上菩提を

修せんと欲せば、必ず堅持齊戒を用ゐよ、戒行若し嚴持せざれば菩提終に成就せず、何を以ての故に戒は萬行の先鋒六度の基址たり、屋宅を造るが如し、先づ其基を固うす、若し基址なければ徒らに架空なり、夫れ戒は大乘三聚戒なり、攝律儀戒は惡として斷ぜずと云ふことなし、即ち諸惡莫作なり、攝善法戒は善として積まずと云ふことなし、即ち衆善奉行なり、饒益有情戒は生として度せずと云ふことなし、即ち普度衆生なり、此の三聚戒は是れ菩薩成佛の戒なり、若し此の三の戒を具せば方さに禪を修すべし、此の心を發さずんば、參禪何の益かあらんや、見ずや、梵網經に云く、衆生受二成戒一即入二諸佛位一と、豈然らずや佛祖の云く、戒能く定を生じ、定能く慧を發す、慧は則ち

心を明かにす、心を明かにすれば性を見る、性を見れば成佛す、成佛作祖は斯戒に由らずと云ふことなしと。

夫れ參禪の一事は極めて是れ向上の玄機、是れ等閑の小可にあらず、須らく當さに大勇猛を發し、大精進を發すべし、亦た慮を息め、緣を忘じ、視を收め、聽を反して將さに平時の好惡の知見憎愛是非情を盡くして掃蕩すること、利刀の一握の絲を斬るが如く、一斬一切斷なるべし、亦た纜を斬て船を放つて徑ちに進み去らんと望むが如くすべし、亦た一人と萬人と鬪戰するに眼を眨かすべからざるが如くなるべし、那んぞ遲疑すべけん、果して能く此の決烈の志を發せば、纔かに參禪の氣象ありとす、既に參禪の氣象あらば、一句の南無阿彌陀佛を執持すること一座の須彌山に靠るが如くに相似れり、搖撼すれども動せず、其心を專らにし、其の意を一にして、或は三聲五聲を念じて同光して、自ら看て云へ、問着念佛底是誰と。

參は這の一念、何れの處より起ると見んことを要す、亘々久うして這の一念を覻破し、疑上に更らに疑を加へて又問へ、問ニ念佛底是誰ニ畢竟是誰と、這裏に到て緊しく繩頭を顧みて放捨することを得ずして、生死の寃家を見るが如く扭着す、即ち了當せんと要して擬議すべからず、商量することを待たず、此の如きの參禪は尅期にして辨を取る。

夫れ參禪工を下すの法は、人の千尺の井底に墜在して、朝に思想し、暮に思量して、單々に只々出ることを求むるの心を用ゐ

て、更らに異念なきが如くなるべし、又要緊の物事を失了するが如くに相似て、朝にも也た尋ね、暮にも也た尋ね、横にも也た尋ね、竪にも也た尋ねて、而も見へざれば、細想沈吟するが如し、亦猶ほ猫の鼠を捕るに内外一如なるが如くなるべし、亦獨木橋を過ぐるが如く、愈々仔細を加ふべし、若し此の如く心を用ふれば、昏散自然にして退かん、行住坐臥嬰兒を守るが如くにして卒暴なるべからず、珠を探るには宜しく浪靜かなるべし、水を動せば之を取ると難し、定水清澄なれば心珠自ら現はる、是故に古人の云く開レ池不レ待レ月池成月自來と、又圓覺經に云く無礙清淨皆依ニ禪定一生と、果して能く是の如く行持せば、工夫定めて手に入ることを得て縱まに禪定現前することを得ん、枯定に

は住すべからず、須らく能く大事に參じて明了し、以て一切種智を圓成すべし、先德の云く莫只忘形與ニ死心一此箇難レ醫病最深と、直ちに須らく坐ながら淵源を究め探りて、始めて見性することを得て天眞を識るべし、正に謂ゆる百尺の竿頭に更らに一歩を進め、直ちに懸崖に手を撤して絶後に再び甦る、方さに之を了事の人と謂ふべき也。

或は話頭あり提起不提起、分明不分明、得力不得力、輕安不輕安、是等の得失有無盡く著すべからず、但參究の意を存せよ。

或は好境界現前することあるも、歡喜することを要せざれ、歡喜すれば魔恐くは心に入らん、或は惡境界現前することあるも煩惱することを要せざれ、煩惱すれは魔恐くは心に入らん、

是等の境界は皆是れ外より來るにあらず、乃ち昏沈して生ずるところ、或は業職の感ずる所なり、凡そ耳に聞き、眼に見る所のものは盡く是れ虛妄なり、俱に著することを要せず精進して做し去れ、古德の云く汝之伎倆有盡我之不采無窮と、眞に是れ色身の上に病あるものなり、這箇强ひて爲すべからず、急に須らく佛を禮して懺悔すべし、念佛して消遣し去る時、病源脫退して然して後ち又參ぜよ、四大本空五蘊非有病從何何來是誰受、病果して能く是の如く覺照せば、亦た發明の時あらん。

倘し見解聰明現前することあるも切に認著することを莫れ、急に須らく之を掃過すべし、若し又知見の境界に住在せば本來の面目を埋沒せん、元來個事の修行は芭蕉を剝ぐが如くに相似たり、一層を剝げば又一層、一層一層を剝げば又一層、直ちに剝き盡くして、更らに手を下すの處なきに到つて、纖かに打成一片を得然して後、着衣喫飯、痾屎放屎、一動一靜、一語一默總て是れ箇の阿彌陀佛にあらずと云ふことなし、此れより心花燦發して、洞かに十方を照すこと、夫の果日の天に麗き、明鏡の臺に當るが如し、一念を越えずして、頓に正覺を成す、惟々此の一大事を明らむるのみにあらず、從上の佛祖、一切差別の因緣悉く皆透項透底して佛法世法、明了ならずと云ふことなし、而も這般の田地に到ると雖も、亦未だ住着すべからず、須らく證悟作家、投機印可を求むべし、印可の後聖凡立せず、取捨兩なから忘る、甚麼の天堂地獄を說き、甚麼の南北東西を分たん、

是等の境界は皆是れ外より來るにあらず、乃ち昏沈して生ずる所、或は業職の感ずる所なり、凡そ耳に聞き、眼に見る所のものは盡く是れ虛妄なり、俱に著することを要せず精進して倣し去れ、古德の云く汝之伎倆有盡我之不采無窮と、眞に是れ色身の上に病あるものなり、這箇强ひて爲すべからず、急に須らく佛を禮して懺悔すべし、念佛して消遣し去る時、病源脫退して然して後ち又參ぜよ、四大本空五蘊非有病從何何來是誰受、病果して能く是の如く覺照せば、亦た發明の時あらん。

倘し見解聰明現前することあるも切に認著することを莫れ、急に須らく之を掃過すべし、若し又知見の境界に住在せば本來の面目を埋沒せん、元來個事の修行は芭蕉を剝ぐが如くに相似た

り、一層を剝げば又一層、一層一層を剝げば又一層、直ちに剝き盡くして、更らに手を下すの處なきに到つて、纔かに打成一片を得然して後、着衣喫飯、痾屎放屎、一動一靜、一語一默總て是れ箇の阿彌陀佛にあらずと云ふことなし、此れより心花燦發して、洞かに十方を照すこと、夫の果日の天に麗き、明鏡の臺に當るが如し、一念を越えずして、頓に正覺を成す、惟々此の一大事を明らむるのみにあらず、從上の佛祖、一切差別の因緣悉く皆透項透底して佛法世法、明了ならずと云ふことなし、而も這般の田地に到ると雖も、亦未だ住着すべからず、須らく證悟作家、投機印可を求むべし、印可の後聖凡立せず、取捨兩なから忘る、甚麼の天堂地獄を說き、甚麼の南北東西を分たん、

徧法界是れ箇の自己の彌陀、盡虛空是れ箇の唯心の淨土、便ち以て一毫端の上に寶王刹を現じ、微塵裏に坐して大法輪を轉じ、未來を接引し、末運に扶持す、斯の如きの禪は、方さに是れ出格の丈夫、超群の烈漢なり。

嗟乎聖を去ること時愈〻遙かにして、源流益〻別る、近者一等の泛々の流あり、智眼も亦明かならず、淨土も亦信ぜず、而して濫りに祖師の機語を錯り會し、聖意の施爲を誤り談て、一心を參究することを知らず、一向に四大に著して、今日兩つ、明日三つ、人を敎へて扭捏し做し作して顚蹶し、奔馳し、定慧現前することを得ずして、遂に反つて狂妄と成ることを致し、虛しく信施を消し、孤り己靈に負き、三塗に輪轉して諸〻の苦楚を受く、只々爲めに頭を打て、作家に遇はず、謂ゆる禪を無みし、淨土を無みす、鐵床幷に銅柱萬刧と、千生と、箇の人の依怙を沒す、苦なる哉、苦なる哉、後學の高賢を勸め戒む、切に宜しく仔細にすべし、我れ今分明に說破す智者は是れ醍醐なりと知り、迷者は反つて毒藥と成す、若しまた之を毫厘に差ふれば、之を千里に失す、嗚呼天晴れて日頭出で、雨下つて地上濕ふ、情を盡くして都べて說破す、只恐くは信不及ならんことを珍重。

參禪要訣 終

明治三十三年七月廿二日印刷
明治三十三年七月廿六日發行

正價金八錢

東京市京橋區中橋和泉町四番地
發行者　奥村金次郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷者　石川金太郎

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地
印刷所　秀英舍

東京市京橋區中橋和泉町
發行所　藍外堂

不許複製

R-09

藝術
博物
版權

3
5